

## 硬組織形成性線維腫と単純性骨嚢胞の合併した2症例

福田 容子 戸塚 盛雄 武田 泰典\*  
鈴木 鍾美\* 福田 喜安\*\* 工藤 啓吾\*\*  
藤岡 幸雄\*\*

岩手医科大学歯学部歯科予診室(主任: 戸塚盛雄教授)

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座\*(主任: 鈴木鍾美教授)

岩手医科大学歯学部口腔外科学第1講座\*\*(主任: 藤岡幸雄教授)

[受付: 1986年5月13日]

抄録: 顎骨の単純性骨嚢胞と fibro-osseous lesion の合併したまれな2例を経験した。症例1は31歳の女性で、右下顎臼歯部の単純性骨嚢胞とセメント質形成線維腫の合併例、症例2は37歳の女性で、左下顎前歯部から小臼歯部におよぶ単純性骨嚢胞と化骨性線維腫の合併例であった。

X線所見ならびに病理組織所見より、単純性骨嚢胞と fibro-osseous lesion との関連性をうかがうことはできなかった。

**Key words:** simple bone cyst, ossifying fibroma, cementifying fibroma, mandible.

### 緒 言

顎骨に単純性骨嚢胞の発症をみることは比較のまれではあるが、その多くは若年者の下顎骨にみられる傾向にある<sup>1)</sup>。また、化骨性線維腫ならびにセメント質形成線維腫は歯根膜由来の良性腫瘍と考えられており、若年者から中高年者の下顎臼歯部に好発する<sup>2)</sup>。現在まで単純性骨嚢胞と他の顎骨疾患との合併例は、まれではあるがいくつかの報告がなされており、両者の関連性の有無が論じられている<sup>3-10)</sup>。今回筆者らは、顎骨の単純性骨嚢胞と化骨性線維腫ならびにセメント質形成線維腫の合併例、2例を経験したので報告する。

### 症 例

症例1: 31歳, 女性。

主訴: 右下顎臼歯部歯肉の腫脹。

既往歴: 特記事項なし。

現病歴: 8年前, 右下顎第1大臼歯をう蝕にて抜歯し, 右下顎第2小臼歯から第2大臼歯部に橋義歯を装着した。3年前より右下顎臼歯部の腫脹を自覚していたが, 疼痛がないため放置していた。1週間前, 左下顎第1小臼歯う蝕のため某開業医を受診したところ, X線検査により右下顎臼歯部の病変を指摘され, 本学附属病院第1口腔外科を紹介され, 来院した。

現症

全身所見, 口腔外所見: 特記事項なし

口腔内所見: 右下顎犬歯部より第2大臼歯部の頬側歯肉に境界明瞭な膨隆を認めた。被覆粘膜は正常, 骨様硬で圧痛はなかった。

X線所見: 右下顎第2小臼歯遠心より第2大臼歯近心にかけて, くるみ大の境界が比較的明

Simple bone cyst complicated by ossifying/cementifying fibroma: report of two cases.

Yohko FUKUTA, Morio TOTSUKA, Yasunori TAKEDA\*, Atsumi SUZUKI\*, Yoshiyasu FURUTA\*\*, Keigo KUDO\*\*, Yukio FUJIOKA\*\*

(Department of Oral Diagnosis, Department of Oral Pathology\* and Department of Oral Surgery I, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 020)

盛岡市中央通1-3-27 (〒020)

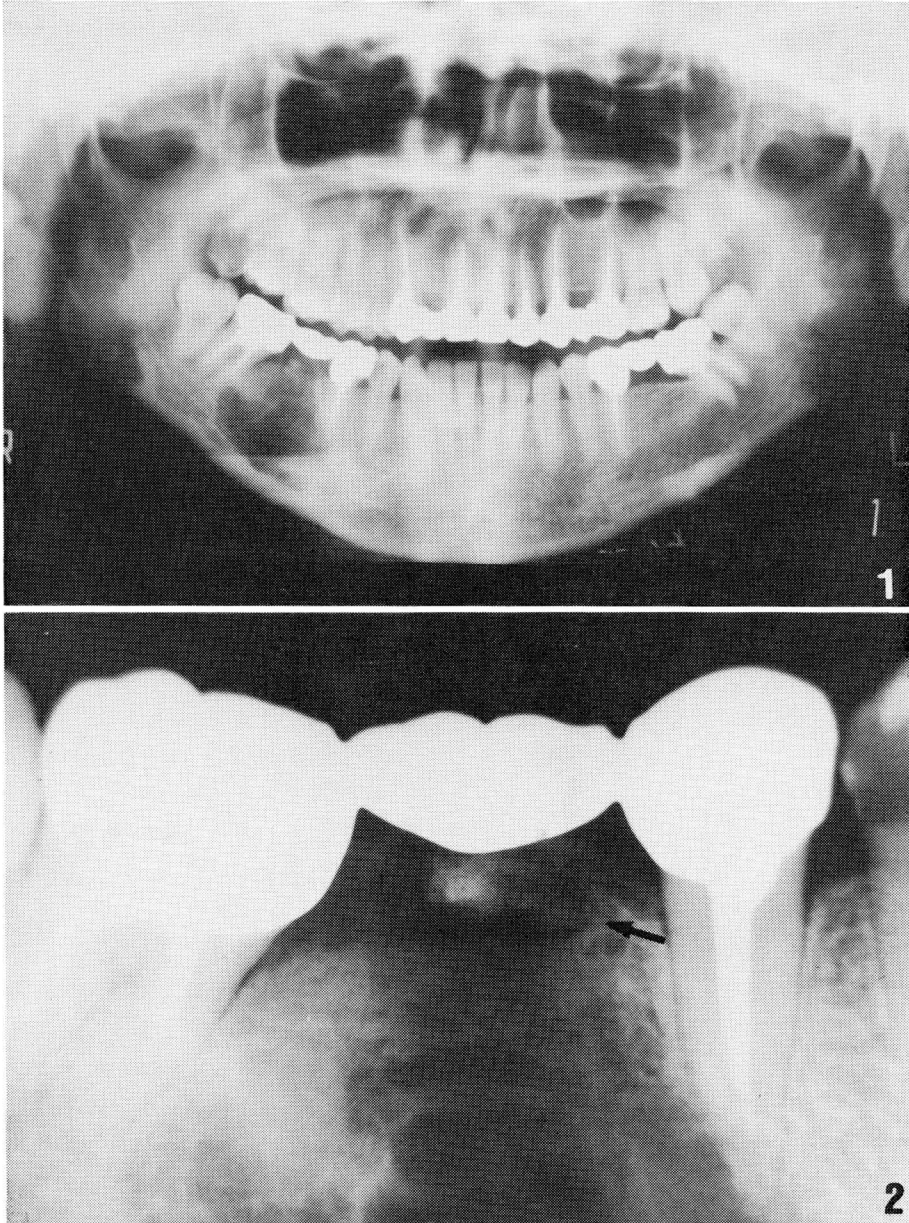
Dent. J. Iwate Med. Univ. 11: 153-160, 1986

瞭な透過像が認められた。その透過像の部分で下歯槽管の一部が不明瞭となっていた (Fig. 1)。また、このくるみ大の透過像に接して右下顎第1大臼歯部橋体直下の骨には小豆大の境界明瞭な透過像があり、その中央部には長楕円

形の不透過像が認められた。また、右下顎第2小臼歯の根尖遠心側の歯槽硬線は消失していた (Fig. 2)。

臨床診断：右下顎骨腫瘍。

生検ならびに手術所見：生検は右下顎第1大

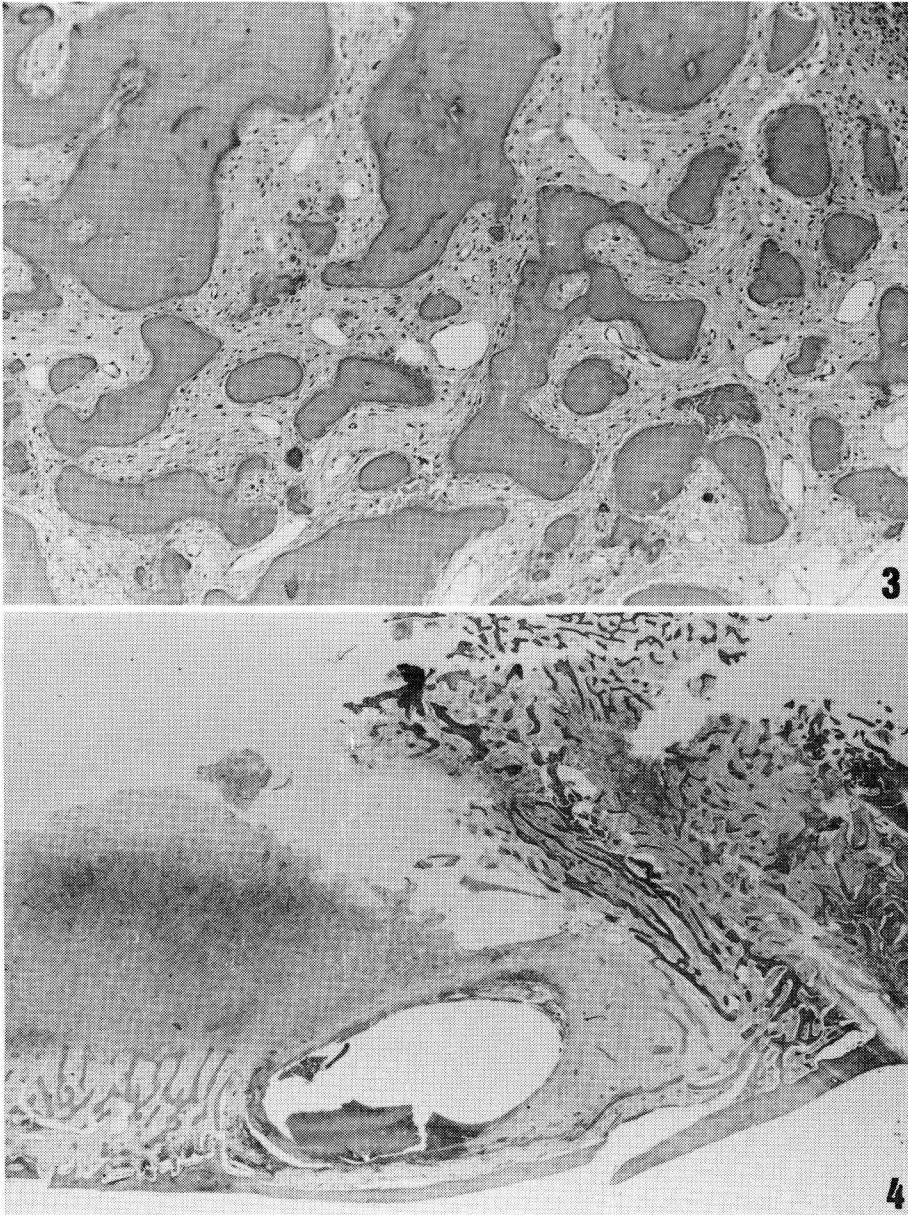


**Fig. 1** : Panoramic radiograph of case 1 (31-year-old-female) showing a well circumscribed radiolucent lesion in the right molar area of the mandible.

**Fig. 2** : Periapical radiograph of case 1 showing a small and well circumscribed radiolucent lesion with central opacity under the pontic of the bridge.

臼歯相当部よりなされ、約1×1cm大の骨片を採取した。X線写真で大きな透過像を示した部分は嚢胞様の空洞を形成しており、内容液が少量認められた。病理組織検査によりセメント

質形成線維腫の診断が得られた。生検1か月後に全麻下で病変部の全摘出と腸骨海綿骨骨髓移植を施行した。術後2年半を経過した現在、再発の徴候はみられない。



**Fig. 3 :** Histopathologic finding of tissue biopsied from the lesion under the pontic of the bridge of case 1. Scattered cementum-like calcified tissue through fibrous background. ( $\times 576$ , H. E.)

**Fig. 4 :** Histopathologic finding of cyst wall of case 1. Hematoma and newly formed bone in fibrous wall without epithelial lining. ( $\times 29$ , H. E.)

病理組織所見：右下顎第1大臼歯部橋体直下の病変部から得られた生検材料は、細胞成分に富んだ線維性結合組織中に多数のセメント質様硬組織の形成が認められた。これら硬組織は少数の封入細胞を有しており、増大融合する傾向にあった (Fig. 3)。

くるみ大の透過像を含む顎骨部分切除材料では、病変部の内腔側は軽度の炎症性細胞浸潤ならびに陳旧性の出血巣のみられる線維性結合組織から成り、上皮成分は認められなかった。線維性結合組織の一部には線維素血栓が認められた。また、梁状の新生骨も多数みられ、これらの骨梁間には多数の拡張した毛細血管が認められた (Fig. 4)。

確定診断：単純性骨嚢胞とセメント質形成線維腫。

症例2：37歳，女性。

主訴：なし。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：左下顎犬歯の歯痛にて某開業医を受診し、X線検査にて左下顎中切歯部より第2小臼歯部の透過像を発見された。穿刺により黄色漿液性の内容液が2.5cc吸引された。左下顎犬歯の症状は抜髄処置により消退した。左下顎中切歯部から第2小臼歯部の精査のため、同医より紹介にて本学附属病院第1口腔外科を受診した。

現症

全身所見，口腔外所見：特記事項なし。

口腔内所見：左下顎中切歯から第2小臼歯部頬側歯肉に発赤，腫脹，圧痛が認められた。同部の歯には軽度の動揺がみられた。

X線所見：左下顎犬歯の根尖部を中心に，左下顎中切歯部から第2小臼歯部に境界明瞭な拇指頭大の透過像が認められた (Fig. 5)。また，左下顎第1小臼歯は根管充填がなされており，根尖部には米粒大の透過像が認められた。なお，これら二つの透過像は境界明瞭な線状の不透過像で境されていた (Fig. 6)。

臨床診断：左下顎犬歯の歯根嚢胞。

手術所見：頬側の骨菲薄部より骨壁を除去す

ると，内部は空洞状で左下顎第1小臼歯根尖部にわずかに肉芽様組織が存在していた他は，軟組織成分は存在していなかった。そこで，左下顎第1小臼歯部の肉芽様組織を掻爬し，病理組織検査を行なった。左下顎犬歯および第1小臼歯には根管充填，歯根端切除を施行した。

術後1年半を経過した現在，X線的に同部は正常で再発の徴候は認められない。

病理組織所見：左下顎第1小臼歯根尖部より得られた肉芽様組織は，細胞成分に富む線維性結合組織中に不定形あるいは類円形の硬組織の形成が認められた。これら硬組織は封入細胞に富んだ骨様の形態を呈していたが，一部セメント質様の部分も混在していた (Fig. 7)。また，一部には好塩基性の石灰化物がみられ，これら石灰化物周囲は放射状配列を呈する膠原線維に囲まれていた (Fig. 8)。

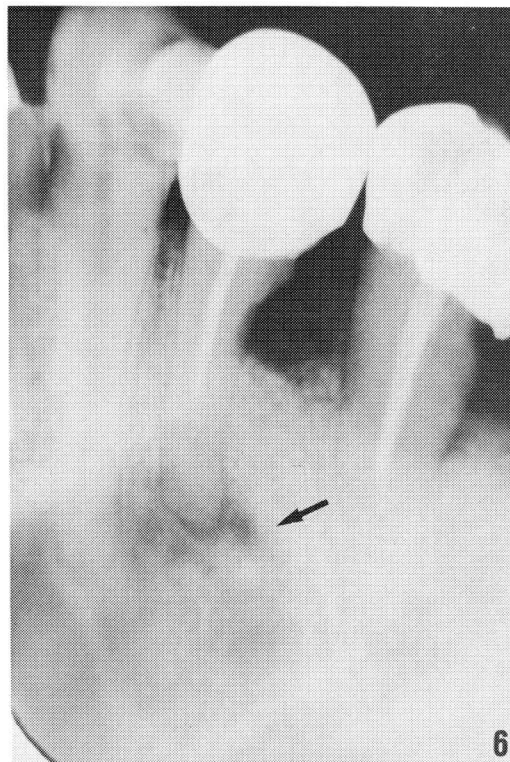
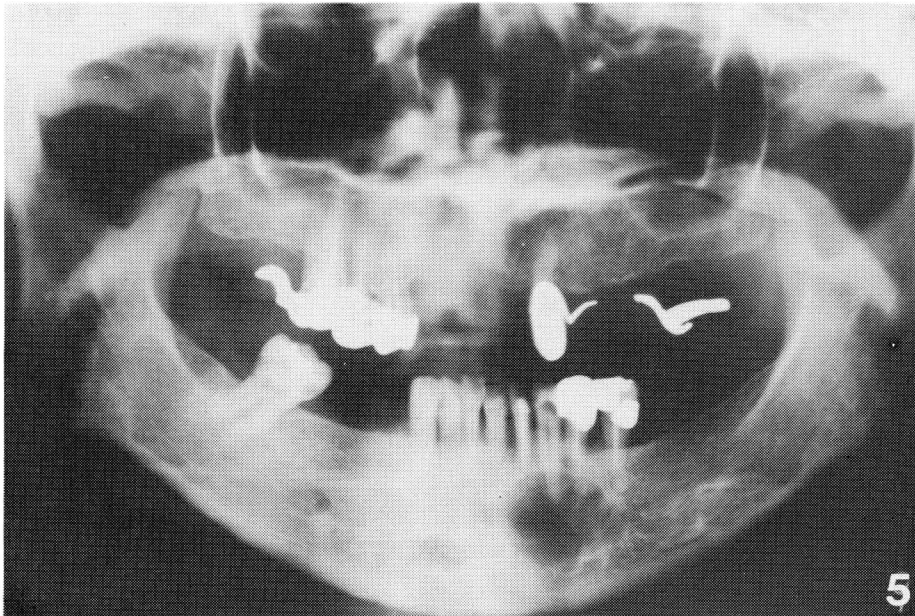
確定診断：単純性骨嚢胞と化骨性線維腫

## 考 察

顎骨に単純性骨嚢胞を生ずることは比較的まれなようであり，また化骨性線維腫およびセメント質形成線維腫もそれほど頻度の高い病変ではない。したがって，この両者がほとんど同一部位に合併してみられる確率はさらに低いと考えられる。単純性骨嚢胞と他の顎骨疾患の合併の原因は，現在のところ不明であるが，前述のようにまれな両疾患が合併してみられることがあり，両者の関連を論じているものもある。

単純性骨嚢胞は別名，出血性骨嚢胞，外傷性骨嚢胞，孤在性骨嚢胞などと呼ばれている<sup>11)</sup><sup>12)</sup>が真性嚢胞ではなく，その組織像は内腔側に線維性結合組織や凝血性物質を認めるもの<sup>1)</sup>，あるいは内腔側に骨組織のみをみるものもある<sup>13)</sup>。

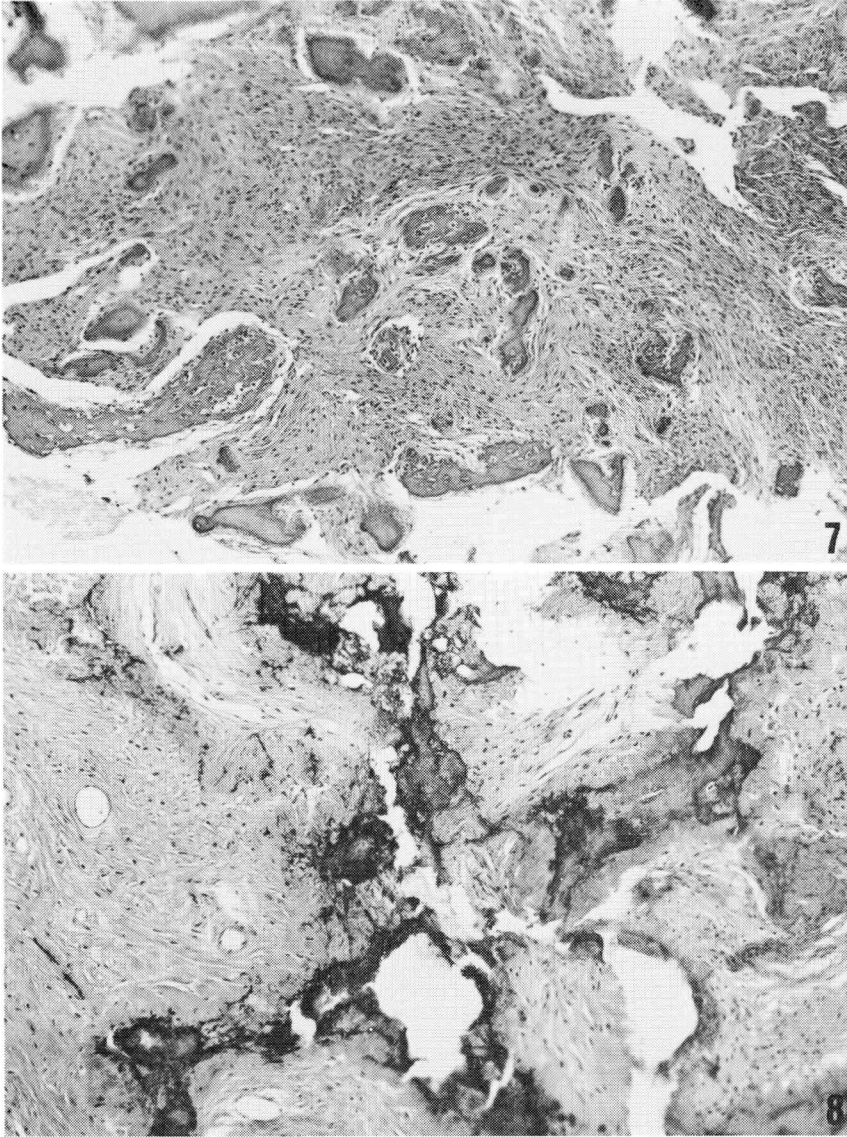
単純性骨嚢胞の発症年齢は，10歳代に多いといわれている<sup>13)</sup>が，本症例は2例とも30歳代であった。病因については未だ不明であるが，外傷が誘因<sup>13)</sup>としてあげられている。症例1は8年前に右下顎第1大臼歯抜歯の既往があったが，症例2は外傷の既往はなかった。このよう



**Fig. 5 :** Panoramic radiograph of case 2 (37-year-old female) showing cyst-like radiolucent lesion between the incisor and the premolar areas.

**Fig. 6 :** Periapical radiograph of case 2 showing focal radiolucent lesion at the preiapical area of the first premolar.





**Fig. 7 :** Histopathologic finding of tissue removed from apex of the root of first premolar in case 2. Numerous osteoid islands in cellular fibrous background. ( $\times 576$ , H. E.)

**Fig. 8 :** Histopathologic finding of case 2 showing irregular calcification in part. ( $\times 114$ , H. E.)

な骨腔の形成は骨髄内血腫の器質化不全による説が有力である<sup>11)</sup>。病変全体を除去し得た症例1では、骨腔内面の線維性結合組織中に陳旧性の出血巣、線維素血栓等が認められた。また、線維性結合組織周囲の骨梁間に毛細血管の著明な拡張が認められた。これらの所見は、

単純性骨嚢胞が何らかの血行障害によることを示唆する所見であると思われた。一般に、単純性骨嚢胞は骨の吸収像がみられることが多いが、ときには修復像もみられるといわれ<sup>11,13)</sup>、症例1でも著明な骨新生像が認められた。

一方、症例2は大きなX線透過像を呈した部

分は、手術時に骨腔内面に軟組織成分は全く認められず、病理組織所見は得られなかったものの、骨腔閉鎖後、同部はX線的に石灰化をきたしたことなどより、単純性骨嚢胞と考えて妥当と思われる。

単純性骨嚢胞の成因の一つに、骨腫瘍の嚢胞化があげられており、Fisher<sup>3)</sup>はfibro-osseous lesionの嚢胞化によると考えられた単純性骨嚢胞を報告している。また、化骨性線維腫ならびにセメント質形成線維腫は、ときに嚢胞、空洞形成<sup>14-16)</sup>あるいは粘液変性<sup>17)</sup>を伴うことがある。これらの嚢胞化が進行した場合、単純性骨嚢胞のような所見を呈するようになるかもしれない。Melroseら<sup>10)</sup>は、florid osseous dysplasiaの34例中14例に17個の単純性骨嚢胞の合併をみている。これは、他報告に比較しかなり高い頻度と思われる。Florid osseous dysplasiaの何例かは巨大型セメント質腫と同様と思われ、血管に乏しい巨大型セメント質腫の組織が感染をくり返すことにより病変部が破壊され、嚢胞化をきたしたことも考えられる。

しかしながら、今回経験した2症例は、いずれもX線写真上では嚢胞と化骨性線維腫ならび

にセメント質形成線維腫との境界は、明瞭な線状の不透過像で境されていた。また、病理組織所見より、化骨性線維腫ならびにセメント質形成線維腫は単純性骨嚢胞に接してごく一部にのみ認められ、その他の嚢胞周囲組織には認められなかった。また、嚢胞内に壊死に陥った硬組織片を認めるなど、化骨性線維腫ならびにセメント質形成線維腫が嚢胞化したと思われる所見は認められなかった。このような所見からみて、単純性骨嚢胞と化骨性線維腫ならびにセメント質形成線維腫との関連は不明で、現在のところこれら二病変は偶然に合併したものと考えられる。

## 結 語

顎骨の単純性骨嚢胞とfibro-osseous lesionの合併した2例を経験したので報告した。症例1はセメント質形成線維腫と単純性骨嚢胞、症例2は化骨性線維腫と単純性骨嚢胞の合併例であった。X線所見および病理組織所見より、これら二病変の関連性を示唆する所見は得られなかった。

**Abstract:** Two rare cases of simple bone cyst complicated by fibro-osseous lesions of the mandible are reported. Case 1 was a 31-year-old female. She was diagnosed as having a simple bone cyst in the molar area complicated by cementifying fibroma. Case 2 was a 37-year-old female, who had a simple bone cyst from the incisor area to the premolar area complicated by ossifying fibroma. The relationship between simple bone cyst and fibro-osseous lesions was obscure by radiographic and histopathological examinations.

## 文 献

- 1) 石川悟朗監修：口腔病理学Ⅱ，改訂版，永末書店，京都，396-399，1982
- 2) Waldron, C. A. : Fibro-osseous lesions of the jaws. *J. Oral Maxillofac. Sug.* 43: 249-262, 1985.
- 3) Fisher, A. D. : Bone cavities in fibro-osseous lesions. *Br. J. Oral Surg.* 14: 120-127, 1976.
- 4) 川平清秀，藤波好文，浜崎栄作，川島清美，山下佐英：下顎正中部にエナメル上皮腫を共存した単純性骨嚢胞の1例，日口外誌，25: 157-160, 1979.
- 5) 河野泰考，樋口勝規，粟原憲二：内腔に硬組織塊を伴った下顎骨嚢胞，口科誌，31: 136-139, 1982.
- 6) 木澤 豊，深谷昌彦，川村 康，辻 哲，小野和生，小島真一：多発性セメント質腫の3症例とその文献的考察，口科誌，33: 580-592, 1984.
- 7) 河野信彦，金川昭啓：歯牙腫と単純性骨嚢胞の併発した1例，日口外誌，31: 2791-2796, 1985.
- 8) 高谷康男，西嶋克己，高橋利近，鶴田敬司，角南次郎，広瀬正泰，白須賀英満：単純性骨嚢胞と共存した根尖性セメント質異形成症と考えられた1例，口科誌，35: 732-737, 1986.
- 9) 佐藤 眞，小松久高，秋田和俊，茶谷勝也，早瀬康博，岸 幹二：いわゆる単純性骨嚢胞の臨床

- 的X線学的検討, 歯放, 26 : 16-22, 1986.
- 10) Melrose, R. J., Albert, M. A. and Mills, B. G. : Florid osseous dysplasia. A clinical-pathologic study of thirty-four cases. *Oral Surg.* 41 : 62-82, 1976.
  - 11) Shear, M. : Cyst of the oral lesions, 2nd ed., Wright. PSG, Bristol, 142-143, 1983.
  - 12) Shafer, W. G., Hine, M. K. and Levy, B. M. : A textbook of oral pathology, 4th ed., W. B. Saunders Company, Philadelphia, 541-544, 1984.
  - 13) Hansen, L. S., Sapone, J. and Sproat, R. C. : Traumatic bone cyst of jaws. Report of sixty-six cases. *Oral Surg.* 37 : 899-910, 1974.
  - 14) 伊藤輝夫, 曾我宏世, 前川尚之, 今井忠之, 赤司睦雄, 有川 宏, 国松仁志 : 嚢胞を伴った巨大な Cementoma と, その顎骨切除後の即時再建について, 日口外誌, 20 : 469-475, 1974.
  - 15) 岩佐俊明, 堀越 勝, 名倉英明, 曾田忠雄, 伊藤秀夫 : 多数の小空洞形成がみられた下顎のセメント質形成線維腫の1例, 日口外誌, 23 : 848-852, 1977.
  - 16) 迫田由起子 : 顎骨の Fibro-osseous Lesion. 第1編 単発病変について, 口病誌, 44 : 217-235, 1977.
  - 17) 藤沢(福田)容子, 戸塚盛雄, 武田泰典, 鈴木鍾美, 工藤啓吾, 藤岡幸雄 : 顎骨中心性の良性線維性ならびに線維骨性病変に関する病理学的検討 岩医大歯誌, 8 : 187-195, 1983.